養子縁組家庭の親子調査から見た子どもの満足度

○　花園大学　和田　一郎（7993）

キーワード：養子縁組家庭・子どもの満足度・社会的養護

１．研 究 目 的

2017 年 4 月 1 日に施行された改正児童福祉法において、社会的養護を必要とする子どもは、家庭養育優先の理念、つまり原則として養子縁組や里親・ファミリーホームなど家庭と同様の養育環境で育てることが理念として規定された。今後は、里親、特に養子縁組里親の役割が高まってくると考えられる。そのため、養子縁組家庭で育った子どもの状況等を把握しその学術的根拠をもって政策提言する必要があるが、養子縁組家庭については実態把握が難しく、養親の状況や子どもの養育状況が分かる調査は 31 年ほど行われていなかったが、日本財団が実施した「養子縁組家庭に関するアンケート調査報告書（2016）」、および「子が 15 歳以上の養子縁組家庭の生活実態調査報告書(2017)」が行われた。これら 2 つの研究は、近年まれに見る養子縁組家庭における実態調査であり、全国規模で行われた点で考えれば貴重な研究であると考えられる。今回はこれら 2 つの研究をより詳細に分析し、養子縁組家庭のより詳細な実態を明らかにすることにより、養子縁組政策の基礎資料となるような研究であることが目的である。

２．研究の視点および方法

本研究は、日本財団（2016）、日本財団（2017）のデータの再分析である。これら研究は、特別養子縁組もしくは未成年普通養子縁組により養子を迎えた家庭の親と子（養子）それぞれを対象として、平成 28 年 8 月 1 日現在の生活状況と意識に関する調査である。「子が 15 歳未満」の親と子、「子が 15 歳以上」の親と子で別々の調査票を用い、「子が 15 歳未満」で親 270 ケース、子 111 ケース、「子が 15 歳以上」で親 309 ケース、子 214 ケースの回答があった。分析にあたっては、親子両方から回答の得られたケースのみを対象としたため、「子が 15 歳未満」の 107 ケース、「子が 15 歳以上」の 204 ケースを分析対象とした。

分析方法はロジスティック回帰分析を行い、子どもの満足度に影響を及ぼす要因について検討した。被説明変数として「子どもの満足度」を用いた。調整変数は子どもの性別および年齢とした。説明変数は「子が 15 歳未満」と「子が 15 歳以上」のそれぞれのデータにおいて、親と子の調査票の設問から、子の性別・子の年齢を調整した上で「子どもの満足度」との関連を検討して個別に関連がみられたもの等を選択した。

３．倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、日本社会福祉学会の「研究倫理規程」に基づき花園大学倫理員会の審査を経て実施している。

４．研 究 結 果

(1) 子が 15 歳未満の場合

「Q21 子どもの心身の状況」については、「心身に障害等はない（OR=5.113；p<.01）」の群、「Q6(3)頻度:親からほめられること」については「あり（OR=6.901；p<.01）」の群において子どもが満足しやすい、という結果が得られた。

(2) 子が 15 歳以上の場合

「Q9 現在の暮らし向きについて」については「普通（OR=4.743；p<.05）」群、「Q28 父母への進路の相談状況」については「十分相談できた（OR=6.587；p<.01）」群、「Q30(5) 頼れる人:愚痴を聞いてくれること_そのことでは人に頼らない」については、「なし（人に頼る）（OR=10.825；p<.05）」群、「Q30(10) 頼れる人:災害時の手助け_家族･親族」については、「あり（家族・親族に頼れる）（OR=8.681；p<.01）」、「Q32(1)生活状況:規則正しい生活」については「できている（OR=8.380；p<.01）」群において子どもが満足しやすい、という結果が得られた。

５．考 察

(1)子が 15 歳未満の場合

養子として迎えられた子の満足度に関連する要因について、子どもの心身の状況や親からの評価が子どもの自分自身への満足度に関連することが示唆された。具体的には、子どもの心身に障害等がない場合や、親から褒められることがある場合には、子どもは自分自身に満足しやすくなる、といった傾向がみられた。これら結果から里親には心身の障害等に関する知識の理解とケア方法のスキルアップが必要であることが示唆される。心身の障害等は養子縁組後に判明することがあることから、養親がこれら知識やスキルを得ることにより、より子どもの満足度が高まる可能性がある。また日ごろから親に褒められる子どもほど満足度が高いことから、ペアレンティングの研修などを養子縁組前に受けることにより、より子どもの満足度が高まる可能性がある。

(2) 子が 15 歳以上の場合

子どもの生活状況や親からの支援が、子どもの自分自身への満足度に関連することが示唆された。具体的には暮らし向き（経済状況）が普通である場合、規則正しい生活ができている場合、親や家族から進路相談や災害時における支援を受けられる場合、愚痴を聞いてくれる人がいる場合には、子どもは自分自身に満足しやすくなる、といった傾向がみられた。経済状況については学歴や仕事の種類、業務形態など様々な関連があると思われるため、子どもがより良い人生の選択をできるようなサポートを養親がとる必要があると考えられる。また親との関係性、進路や愚痴などについては、日頃からのコミュニケーションが子どもの満足度に関連するということが示唆されるため、子どもとの関係性が良好に保つことや、良好でなくなった時に対応できるケア体制の構築が必要だと考えられる。